

とくしま 終活事情

⑧

終活カウンセラー協会代表理事

武藤頼胡さんに聞く(下)



に出てきて、故人をしのぶ時間もない。

最低限、自分の思いは家族に伝えておいてほしい。私はこう生きたいと話しておけば、残された家族にとって

私の母が亡くなったとき、母だったらこんな葬儀がいいかなと一生懸命に考えた。だが、亡くなった後では母の思いを聞くことができない。これで良かったのだろうか、事前にもっと話しておけば良かったという心残りがあった。

親が病院で亡くなる時、自宅に連れて帰るか、葬儀社の安置所に行くかといった選択を迫られる。私の場合は、泣いている時間もなかった。準備をしていないと、やらなければならぬことが次々

残された家族の指針に

だけが過ぎてしまう。そもそも親の財産をどうするかは、親が決めること。もめ事の原因は取り除いておく方がいい。細かな話だが、銀行の口座番号が分からないうちに、定期購入していた商品がいつまでも届くといった手続き関係で困ることが多い。私の場合は印鑑がどこにあるのか分からなくて、探すのに時間を要した。

子どもから親に終活の話題を切り出す際は、いきなり葬式や墓について聞くのではなく、「どんなことを大事にしてきたの?」「これから、どこに行きたい?」「といった身近な話題から入るといい。

親や自分の配偶者の友人を知っているだろうか。誰を葬式に呼ぶだろうか。誰を葬式に呼ぶだろうか。連絡先は分るのか、案外、知らないものだ。私は85歳の父親にやっとポツリポツリと聞き始めたところ。「昔、何が好きだったの?」と問いかけると「もう一度野球を見に行きたい」という話が出てきた。野球が好きなんだと、知

自分の思い伝えよう

(聞き手=山口和也) おわり